

「ミュージシャン・アーティストのまち・福岡」形成戦略

市民研究員 大澤 理宗

はじめに

少子高齢化、それに伴う経済力低下や地域の過疎化、成熟国家が必ず迎えるであろう社会問題が顕在化されて久しい。しかし、問題は深刻に進むばかりで有効な手立てが打たれていないまま今日を迎えている。日本国内では「ヒト・モノ・カネ」が東京に一極集中し、地方は疲弊し、2040年には約5割の地方自治体が消滅する可能性があるという日本創成会議においても発表されている。

地方は地方の特色を活かして地方交付税交付金を主とする国への異存なくとも自立していける「かたち」を具現化していかないといけない。これは全国的に喫緊の課題である。

福岡市は九州の最大都市であり、九州の玄関口でもある。地政学上もアジアに開かれたまちである。この特色を活かし、国内外に情報を発信し、短・中長期インバウンドを見込める有効な戦略を打ち出すためのグランドデザイン「ミュージシャン・アーティストのまち FUKUOKA」を提案する。

1. 提案の背景

1960年代のフォークソング全盛期より21世紀の今日に至るまで福岡から多くの有名なミュージシャン・タレントが輩出されている。しかし、フォーク喫茶やライブハウス等で福岡市を中心に活動してきたミュージシャンがある程度のキャリアや実績を持つと東京に進出し、活動拠点は福岡から離れる。音楽であろうと演劇であろうとプロとして芸能活動をすることによって日常生活を送るには首都圏でないと難しい、という現状がある。換言すれば「ご当地に多く存在する原石だが、光り輝くためには磨かれないといけないのでそれが可能な東京に転がっていく。それを福岡は指をくわえて見ている」ということになる。そして磨かれた原石は宝石となって価値を有し、全国的に文化的かつ経済的効果をもたらすが、その時潤うのは東京である。原石を磨き輝かせ、宝石となった地域の人材をご当地で活かす、つまり結実する環境を福岡市に整備することは、今まで開拓されていない文化的、経済的効果をもたらすことに繋がる。

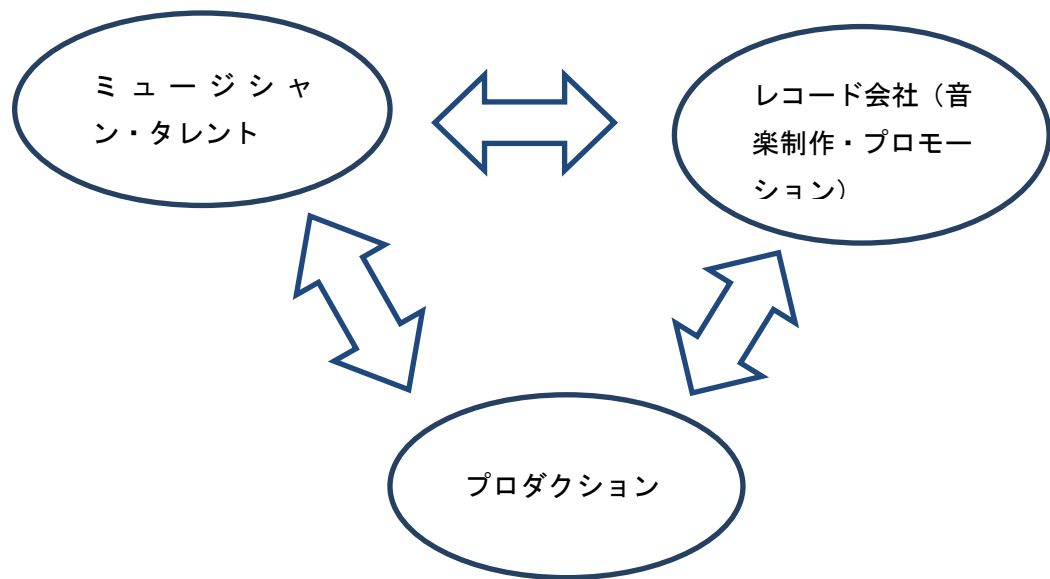
「地方の時代」という言葉も叫ばれて久しいが、東京への一極集中は進むばかりである。中央集権の打破を実現できなければ真の地方の時代は迎えることはできないと考えるが、その折には道州制導入等、地方の自立的システム構築に着手することになる。その様な時代を今から真剣に見据え、踏み出さなければ、致命的なダメージを地方は受けることになる。全国的に知名度がある歴史的観光資源が乏しい福岡市が「アジアの先進モデル都市」になるにはコンテンツにおいてブランディングしていく取り組みが最も重要であり、ご当地の特性を活かした最も有効な手立ての研究が今回のテーマである。

2. 現状と課題

「アーティスト」という言葉は音楽家や役者から画家まで広範な意味を包含するので、ここでは舞台上がるミュージシャン達が継続的な仕事としてこの福岡で結実する環境整備に特定して述べる。

全国的にも音楽都市を標榜する或いは標榜していた都市は「群馬県高崎市」「岡山県津山市」「福島県郡山市」等いくつかあり、個性を出した音楽祭を実施したり、音楽都市宣言をしている自治体もある。しかし、これらは「音楽都市」であり、ここで当市が目指すべきまちは「音楽都市」ではなく「音楽産業都市」。ミュージシャンが継続的に音楽活動を行うことによって日常生活を送れる環境が必要である。単発のイベント等で一時的な盛り上がりを出すのではなく、音楽関連関係者、団体・企業等が有機的に連携を取ることが重要となる。

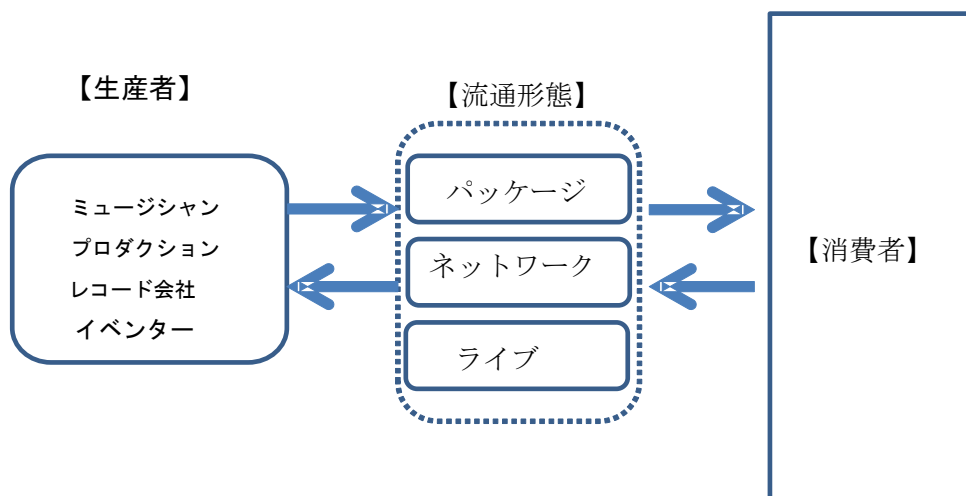
図1 現在の音楽産業（主にCD等パッケージ）の関連図①



出所：参考文献（1）より

現在、インターネットの普及により、その情報発信手段も多様化された。CDが売れない時代となり、業界はライブ重視の傾向にあるがこの様な流通形態の変化に適切に対応する必要がある。通信事業者、消費者含む関連図②として捉えられる。

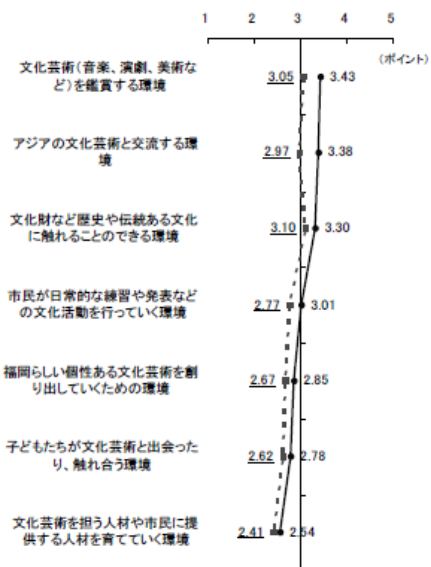
図2 現在の音楽産業の関連図②



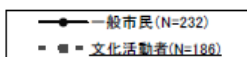
出所：(1) より

上記、生産者及び流通に関わる諸産業が福岡市に存在し、福岡市で結実できるハード及びソフト展開が必要になる。演劇においても共通するシステム構造が存在する。

図3 福岡市の文化環境評価



注) 各ポイントとは、5段階評価の平均値であり、全員が「充実」なら5点、全員が「不十分」なら1点であり、「どちらともいえない」ならば3点となる。



出所：(2) より一部抜粋

※「福岡らしい個性ある文化芸術創り出していくための環境」は、【一般市民】の評価2.85、【文化活動者】の評価は2.67。

「文化芸術を担う人材や市民に提供する人材を育てていく環境」は、【一般市民】の評価2.54、【文化活動者】2.41で両項目とも3を割っている。

また、平成 24 年度 3 月策定「福岡市拠点文化施設基本構想」には市民の文化環境の満足度の評価が掲載されている。これによれば、1（＝不十分）から 5（＝充実）までの 5 段階で評価されているが、その内 3（＝どちらでもない）未満の相対的に低いと評価されているものに「福岡らしい個性ある文化芸術を創り出していくための環境」「文化芸術を担う人材や市民に提供する人材を育てていく環境」という二項目がある。上記のような音楽産業都市の実現を目指すことはそれらの対応策という位置付けを与えることでもある。以下に施策提言を行う。

3. 具体的施策提案

以下に提案する施策は、平成 24 年 12 月に策定された福岡市基本構想「活力と存在に満ちたアジアの拠点都市」第 9 次基本計画施策 1－4「心豊かに文化芸術を楽しむまちづくり」の具体的施策の一つとして位置付ける。

(1)「音楽屋台村」の創設

一般住民が日常生活において気軽に音楽に触れられるように、生演奏が聴けるレストラン・バーの集積エリアを設置する。ハードは行政において建設して民間企業もしくは個人事業主に経営者として賃貸借契約を締結する。タイ・チェンマイのピン川沿いにそのモデルとあるようなレストラン群があり、毎日西洋人・アジア人を中心にぎわっている。インバウンドが成功している都市なので参考にする。演奏するミュージシャン紹介は、人材リスト等の情報を把握している行政もしくは委託を受けた民間企業等がコーディネーター役を果たす。

福岡市においては下記の候補地をあげる。

- ① 福岡市に流れる二級河川の川沿い・川床を利用。
- ② ウォーターフロント地区計画、博多港港湾計画に基づいた「賑わいづくりの交流空間」
- ③ 福岡城内（整備計画の中で盛り込む）
- ④ 箱崎九大跡地

①について

屋台村の建設費用はかかるが、河川は公共用地なので新たな用地買収、移転補償費等の負担がない。福岡市を流れる主たる河川に一級河川はなく、二級河川ばかりだが、二級河川は国ではなく、県の管理なので音楽屋台村が福岡市と福岡県で地域活性化、インバウンドの有効な手立てという方向性でコンセンサスが取れると実現性は高い。川沿い、川床のミュージックレストラン、ミュージックバーという開放的な空間も魅力的である。



写真1 候補地【那珂川】 出所：著者撮影



写真2 水上公園構想図 出所：(3)

※中央区と博多区の区界を流れる二級河川。商業地域にあり、都心であることから最も賑わいが望める候補地である。福岡市と西鉄㈱で開発を進めている「水上公園リニューアル」においても屋根上や階段ベンチはイベント行うステージ機能を有することからこのエリアに音楽屋台村も集積し、「生演奏が気軽に聴けるゾーン」という特色を出すことも可能。インパクトも強い。しかし、福岡市を流れる二級河川の中では相対的に川幅が狭く、生演奏の音量が課題になるので、整備する場合、その規模や詳細な位置の精査（より湾岸沿いがベターと思量）が必要となる。



写真3 候補地【御笠川】
出所：著者撮影



写真3 御笠川
出所：著者撮影

※那珂川に次いで都心に近い二級河川であるが、やはり那珂川と同様に下流でも相対的に河川幅が狭く、川沿いは共同住宅が多いことから、この川においても音楽屋台村を設置する場合は精査が必要となるが、西側が住宅が多いのに対し、東側は高速道路・旧国道三号線で音量の問題は屋台村の建設デザインでかなり緩和されるのではないかと。



写真4 候補地【室見川】 出所：著者撮影

※福岡市早良区と西区の間を流れる二級河川。都心から少し離れ、交通アクセスは相対的に良くはないが、湾岸近くは河川幅が広く、整備次第でマリナタウンやマリノア、シーサイドももちといった近郊の観光地と連携した集客誘致できるエリアになる可能性を秘めている。



写真5 シーサイドももち 出所：(4)より



写真6 候補地【多々良川】 出所：著者撮影

※東区を流れる多々良川も都心から離れるが、河川幅は広い、西側は流通センター等企業オフィスが並んでいる。東側は道路を挟んで戸建て住宅が多い。整備環境としては最善と思われるが、他のどここの候補地よりも交通アクセスが悪いという大きな課題が残る。

②について

現在策定中の「ウォーターフロント地区再整備構想」によると集客賑わい作りのゾーンを都心の海辺空間に設けることが謳ってあり、アジアのゲートウェイで①と同じような開放的な空間が演出できることから博多港エリアも候補地として挙げられる。平成27年12月12日付西日本新聞朝刊で一面に掲載された記事によれば「JR九州が博多駅と博多港のウォーターフロントを結ぶロープウェーで結ぶ構想を検討」されている。そのインフラ整備費も実現すれば交通アクセスも良い一大観光地となりえる。

図4 ウォーターフロント地区再整備構想図および関連報道



出所：(5) より抜粋



出所：(6) より抜粋

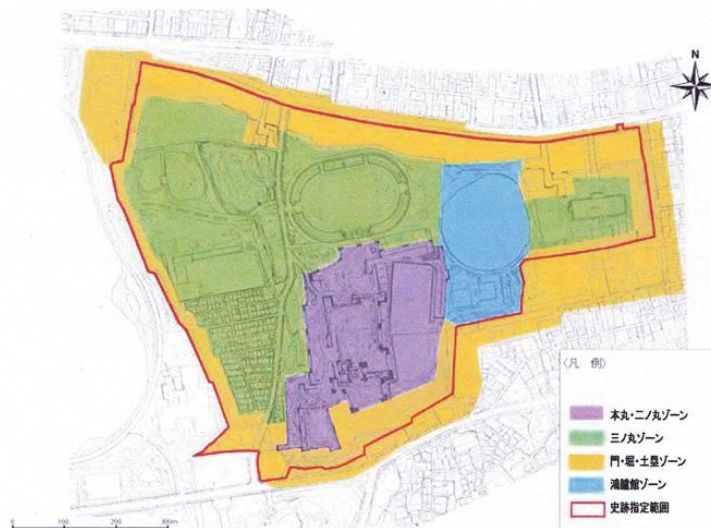
③について

平成 26 年 6 月策定「福岡城跡整備基本計画」によれば三の丸ゾーン（平和台陸上競技場含むエリア）に『市民活用を考慮した施設等の設置』と整備の方向性が定められている。また、舞鶴公園・大濠公園を一体的に整備するための同計画の上位構想「セントラルパーク構想」にも、『芸術文化施設として広大な緑地空間とが混然一体となって、様々なイベントを含む芸術文化活動の舞台として、人々の交流に大きな役割を果たすことが求められています。また、さらなる芸術文化機能の充実に加え、福岡の多様な芸術文化を紹介する拠点として、より格調高く魅力的な空間となることが期待されています』とあり、同構想の「観光」の見出しにおいても、『芸術文化施設の集積を活かした、さらなる機能の充実や施設間の連携、四季 折々の花を楽しめ、他の観光資源とも連携した取り組み等により、福岡の観光・集客の拠点としていくことが期待されています』とあり、「芸術文化」というキーワードが整備のディレクションを示している。これらの整備計画及び構想の具体案として候補地に挙げる。

図5 福岡城跡整備基本計画

1 地区区分計画（ゾーニング）

整備の対象範囲である国史跡指定地は、城郭の構造や現況の特質から、以下のとおり4つのゾーンに分けることができ、各ゾーンの特徴を踏まえた整備を行っていく。



出所：参考文献（7）より

※「福岡城跡整備基本計画：福岡城跡三の丸ゾーン（平和台陸上競技場、舞鶴中学校辺りを包含するエリア）」と「セントラルパーク構想：憩いと文化の交流ゾーン」における整備の方向性と整合を取りながら平和台陸上競技場の城外移転の検討及びそれに伴う跡地利用も含めて都心に近いこの当エリアの利便性を活かした整備が期待される。

図6 セントラルパーク構想ゾーニング図



出所：(8) より

ゾーニング図

④について

九州大学箱崎キャンパスの跡地利用については、平成 25 年 2 月に「九州大学箱崎キャンパス跡地利用将来ビジョン」に基づき作成された「九州大学箱崎キャンパス跡地利用計画」(案)により検討されている。

それによると今後、跡地利用として、機能配置を進めるための(1)成長・活力・交流ゾーン、多様な人材を育てる教育・研究のための(2)教育・研究ゾーン、安全・安心・健やかに暮らす環境づくりを進める(3)安全・安心・健やかゾーンにエリアを分けて有効な土地利用を促進していく考えである。中でも将来構想イメージとして位置付けられている(1)成長・活力・交流ゾーンはその特性として国道三号線が通っており、JR箱崎駅、福岡市営地下鉄箱崎九大前駅も付近あることから、その交通利便性の高さを活かした大規模な土地利用が可能である。計画案においても「福岡市の持続的な成長に貢献する新たな活力交流を生み出すまち」というビジョンがあり、当該ゾーンに音楽屋台村を創設することも方向性に適した取り組みだと考える。

⑤音楽屋台村提案に関する総括

音楽屋台村の創設のコンセプトは、福岡市で「日常的かつ開放的に音楽が聴ける環境作り」であり、日本国内のみならず、国外からのインバウンドをねらえる有効な手立てと考えるので、その意味では川沿い・川床に作られるのが最もインパクトが強いと思量する。どこの川がよいかは、それぞれにメリット・デメリットがあり、事業資金や住民の意向も踏まえ、十分に精査する必要がある。

(2) ミュージックシアターの設立

日常的にステージを必要とするミュージシャン・アーティスト達が福岡で暮らし、文字通り「ミュージシャン・アーティストのまち」に福岡市がなるためのシンボリックなステージ(ハード)を設立する。音楽や演劇、ミュージカルその他エンターテインメントのステージを共有するステージを設け、世界に向けてブランディングしていく。

平成 28 年 2 月 6 日の西日本新聞夕刊の記事に「ライブ会場福岡の難 ゼップ閉鎖 不足に拍車」という見出しで 5 月 8 日に営業終了するホークスタウン(中央区)の大型ライブハウス「Z E P P 福岡」の閉鎖により、今後の福岡ではライブ開催は 2 割減るという懸念の記事である。

平成 19 年にメルパルクホール、そして二年後の平成 21 年には電気ホールが相次いで閉鎖されて会場不足の懸念が音楽関係者の中で広がっている。東京在住のミュージシャンが福岡で興行を行うには移動費等のコストがかかり、週末はともかく、客が多く入らない平日は採算が難しい。

図7 ライブ会場に関する報道記事

ライブ会場 福岡の難 ゼップ閉鎖 不足に拍車 「開催2割減」懸念 [福岡県]

西日本新聞Web

ホークスタウン(福岡市中央区)の再開に伴い、大型ライブハウス「ゼップ福岡(Zepp Fukuoka)」が5月8日に営業終了する。1施設の閉鎖ではあるが、福岡市の音楽関係者の間では、会場不足への不安は大きく、福岡都心でのライブ開催が「2割減」と懸念する声もある。首都圏では大規模施設の相次ぐ改修などによる会場不足が「2016年問題」として取りざたされており、福岡でもよそごとではなさそうだ。

コンサート会場には、体育館のような形で、観客が立ったまま音楽を楽しむ「ライブハウス」、椅子がある「ホール」、大規模な室内競技場などを利用する「アリーナ」がある。1999年にオープンしたゼップ福岡は立席で2千人収容でき、多くの人気アーティストが公演。全国に6カ所あるゼップを回るアーティストも少なくない。公式サイトによると昨年の稼働日数は130日で、人気の高いロックバンドやアイドル、精流グループの名が並ぶ。

ゼップと同規模の会場となると、福岡シンフォニーホール(中央区、1867席)、福岡市民会館大ホール(同、1770席)、福岡サンパレス(博多区、2316席)と全て椅子つきのホールだ。ライブハウスでゼップに次ぐのはドラムロゴスだが、収容は半分以下の700人とどまる。

立ったまま自由に盛り上げることができるライブハウスと、観客の動きに制約が出るホール、「ライブハウスの質感を大事にするアーティストは、ホールだと公演を敬遠する可能性もある」(イベント会社関係者)という悩みもある。昨年、ゼップ福岡でライブをした人気バンドKANA-BOONの谷口龍さんは「ゼップ福岡が無くなると寂しいけどこやっていいの、こっちに来るのが難しくなると思う」と話した。

□ □

仮に別会場での公演をアーティストが受け入れたとしても、問題は残る。

福岡市内では近年、メルバルクホール福岡が2007年、電気ホールが09年に相次ぎ閉鎖。いずれも約1200人の収容規模だった。今後は、キャナルシティ劇場が再び劇団四季の専用劇場となり、これまで年間百数十日あった演劇や音楽の公演が、別会場に流れることも予想され、会場不足に拍車が掛かりそうだ。

さらに集客が期待できる週末は、各施設とも人気があり、枠は限られる。ドラムロゴスを運営するドラムグループの西本真也社長は「福岡は東京からの移動費もかかり、お客が多く入らないと厳しい」と語る。イベント会社BEAの伴雅私常務も「福岡では平日の集客は難しい。アーティストによっては週末に比べて3割ぐらい減る」と話す。

「『東名阪プラス福岡』だったツアーが来なくなる」といった悲鳴も音楽関係者から漏れる。伴常務は「1割5分から2割は公演が減るだろう」と予測する。西本社長は「ゼップクラスのライブハウスがないままだと福岡の音楽シーンには良くない影響が出る」と危機感を募らせ、「海岸エリアに大きなライブハウスをつくることができればいい」と提案する。

全国のゼップを運営する「Zeppホールネットワーク」の観音社ソニー・ミュージックエンタテインメントは「なるべく早く再開できるように尽力している」と言うが、先行きは不透明だ。

出所：(9)より

確かに会場不足は興行数減に繋がり、福岡の元気にも関わる看過できない問題である。また、最近業界はCD等のパッケージ商品の売り上げが低迷しており、ライブ事業への傾倒が顕著である。ライブは安定した収益事業化を目指せるコンテンツとして有力な事業だからである。ライブ市場の拡大は今後のトレンドであり、そのトレンドを押さえた環境整備は必要である。

これらの諸問題を根幹から解決するには、前述のとおり、魅力的なソフト展開が可能な環境整備が必要であり、シンボリックなハード、魅力的なソフト展開が両輪として必要であろう。なお、場所としては①で検討したような条件を考慮し、

福岡城内が最適と考える。

※福岡での公演数は平成17年以降、堅調に伸びていて、県内の公演数も九州各県の中で唯一増えている。

しかし、主催者は東京からの費用を考慮した上で採算性が高い興行を打つことを考慮すれば、会場不足は深刻な問題であるし、人材が東京に一極集中している現状も打破しなければならない。故にミュージシャンやアーティストが福岡在住であることが極めて望ましい。

(3) 音楽版真打制度の導入

(2)のハードが新規に建設されるものにせよ、建て替え中の福岡市民会館の様な既存だが、再築されるものにせよ、そのシンボリックなステージの位置付けが明確になっている上で、音楽版の真打制度導入を提案する。福岡をミュージシャン・アーティストのまちとして成立させるためには恒常化したムーブメントが存在し、世界に情報発信していく必要が

ある。

落語や漫才にみられる様な「一枚目、二枚目」いわゆる前座から徐々にベテラン勢がステージを務める。格付けは厳密に明確化することは現代音楽にはそぐわないので不要だと思われるが、ベテランから若手までの年齢的な縦軸の連携を途切れさせず、若い可能性を発掘し、育成していくシステム作りは福岡で起こる音楽や演劇のムーブメントを一過性のものに終わらせず、恒常化していく為に有効な手立てだと考える。運営主体はハードができた場合、指定管理者が担うことになることになると予測されるが、音響や照明等の専門性が高い設備の利用、ホールマジメントができる、ソフト展開ができるなどの諸条件を詳細につめて決定する必要がある。（唐人町にある福岡甘棠館の指定管理者、有限会社劇団ショーマンシップさんは自らが劇団であり、芝居等の事業を展開されている。）

このような個性的なシステムを導入した上で事業を展開していく。最終選考会ではこのステージに上がることができるということを謳ったオーディションイベントを定期的で開催したり、このステージに出演できることがステータスになるようなブランディングに成功すればご当地の原石（人材）を東京に流出させないだけでなく、東京はじめとする県外、そしてアジアを中心とする海外のアーティストからも「ステージ立つなら FUKUOKA」を目指すという求心力が強いまちにしたい。タイムリーなPR手段としては、2020年開催される東京オリンピックに関連して文化庁が推進している「文化プログラム」に参画し、当プログラムの取り組みという位置付けで全国、全世界に展開する枠組みを作り、「文化芸術立国」の一環を担うことも一考である。文化庁はオリンピック東京大会以降も推進するプログラムとして重要視していることから我が国のリーディングプロジェクトとして実現できれば日本全体の文化芸術の活力のコアとなりうる。

4. 現場関係者のインタビューから聞こえてくる思いや提案

昨夏、富士山麓にて10万人を動員した長渕剛バンドのドラマー矢野一成、同年12月にタイバンコク郊外で12万人の観客を集めたBMMF（ビッグマウンテンミュージックフェスティバル）に日本のミュージシャンとして招待された博多ザ・ブリスコ、同年11月にZEP P福岡でミスター・チルドレンと2マンライブを行ったヒートウェイヴのベーシスト渡辺圭一等、アーティストを輩出しているだけでなく、現在も福岡市在住で全国的に活動している一流ミュージシャンは多い。また、演劇の世界でも福岡市を拠点に全国巡業・活動している俳優・女優も少なくない。

その中のほんの一部だがインタビューを敢行したので抜粋して掲載する。



写真7 矢野一成氏 出所：(10) より

「僕らが博多のロックスターに夢中になっていた若い頃、ミュージシャンが観客を楽しませているだけではなく、観客がミュージシャンを育てている部分もあった。そんな愛がこのまちにはあったんだ。その復活の為に福岡に戻ってきた。現在はドラム・ワークショップという形で若手育成にも努力している。今後はTVをはじめとするマスコミや行政とも同じディレクションで一緒に取り組んでいければと思っている」(長渕剛バンド
ドラマー：矢野一成)



写真8 ジャガー池見氏 出所：(11) より

「福岡のミュージックシーンは10～20代の若手ミュージシャンと僕ら40～50代のミュージシャンでは隔絶の感がある。縦軸が繋がっておらず、若手ミュージシャンの育成に僕らベテランミュージシャンも力を注がなければいけない。またオーディエンスも裾野も広げるべく、他の表現者達とコラボレーションするのはとてもいいアイデア

と思うね。普段演劇を見る人がロックンロールライブを見たり、音楽しか観に来ない人が演劇を観ることができる環境が欲しいね。それが実現する環境でイベント展開をしていきたい。

現在僕は、「ジャガー池見のLOVE&HAPPINESS」というUstreamの音楽番組のパーソナリティを務めているけど、昔TNCテレビで放映されていた「エルモーションラグ」の様に、地元で本物のミュージシャンがいること、そして若手ミュージシャンを露出させていける情報発信ツールとしてTVはやはり有効だと思う。あの手の番組の復活を望んでいる現場関係者は多いと思うよ」(博多ザ・ブリスコ：ボーカル&ギター、ジャガー池見)



写真9 玄海椿氏と筆者（向かって右） 出所：(12) より （芝居屋企画主宰：玄海椿）

「劇団ひまわりや第一薬科大学付属高校（芸能コース）の講師をしていて、福岡で見つけた原石はほとんど上京しています。寂しくもあるけど、舞台の世界で可能性を探るなら今はまだ、それも仕方ないですね。博多座も主役は東京の役者さんですから。しかし、原石はたくさん福岡にいるから中央に頼らず、ご当地の人材で舞台ができるようになるのが目標です」

5. まとめ

昨年東京・お台場で開催された起業家の祭典「SLUSH ASIA」にてジュディアンドマリーのギタリストTAKUYAが「今後福岡はアジアの音楽のハブになれる。音楽スタジオを福岡に作る」と宣言。彼のように福岡に特別な縁がなかったメジャーのミュージシャンが音楽をやるために福岡を選んだことがコンテンツのまちづくりを進めている福岡市の今後進むべき方向性を明確に示している。「リバプールサウンド」の次に世界のブランドになるのは「フクオカ サウンド」。そんな言葉が世界で聞こえてくる時代はそう遠くはない。

そして音楽だけでなく、ステージを共有できる様々なミュージシャンやアーティスト達が地域で磨かれ、地域に愛され、地域で結実して宝石になり輝く・・・福岡で夢が追える。世界的にその魅力が情報発信され誰もがFUKUOKAを訪れたいくなる。そんなまちに福岡市なることを切に願い、以上を提案したい。



写真10 筆者も出演した大衆演劇「紅色五人女」の出演者たち

出所：(13) より



写真11 筆者プロデュース

大橋アイドル「ディンプルリップル」

出所：(14) より

<参考文献>

- (1) 音楽産業都市の課題（藤本典嗣 福島大学准教授）
- (2) 福岡市拠点文化施設基本構想
- (3) 福岡市ホームページ
http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/49280/1/sui_jyoukouen.pdf
- (4) 福岡市社会福祉協議会ホームページ
<http://www.fukuoka-shakyo.or.jp/introduction/sawaraku/index.html>
- (5) 福岡市ホームページ
<http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/46897/1/saiseibikousou.pdf>
- (6) 西日本新聞 2015年12月12日朝刊一面掲載記事
- (7) 平成26年6月福岡市策定「福岡城跡整備基本計画」
- (8) 平成26年6月福岡市策定「セントラルパーク構想」
- (9) 西日本新聞 2016年2月10日付夕刊
http://www.nishinippon.co.jp/nnp/f_toshiken/article/223809
- (10) 本人（矢野一成氏）より画像提供
- (11) 本人（ジャガー池見氏）より画像提供
- (12) 芝居屋企画より画像提供
- (13) 芝居屋企画より画像提供
- (14) ㈱エングより画像提供